

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

第17回 苦節3年(笑)! 綺麗なビルに引っ越しました

ミナミの国に来て、3年目になりました!

はじめてこの国に来たときは、文字どおり、右も左もわかりませんでした。経済産業省主宰のビジネスマッチングに参加したのが、ミャンマーに来たきっかけです。

正直に告白すると、当時、ミャンマーという国がどこにあるのかさえ、正確には知りませんでした。もちろん東南アジアの「何処か」にあることは、分かっていたのですが、白地図にミャンマーの国を書き込めと言われたら、全くトンチンカンな答えを書いていたと思います。

その程度の「かる〜い」知識しかない状況だということに、初めて訪ねたその場で、私はこのミナミの国に進出しようと決めていました。冷静な第三者から見たら、その場の雰囲気にもまれたとしか言いようがありません。

そのころのミャンマーは、今よりもっと通信事情も電力事情も悪く、法律も未整備で、進出している日系企業は、ほとんどありませんでした。なんといっても、申告納税制度がまったく普及していない状況で、会計事務所の仕事なんて、必要とされないのではないかと状況。理性的に考えれば、個人で進出するにはあまりにリスクの高い意思決定でした。

原尚美が私のクライアントだったら、やめた方がいいよと、アドバイスしたに違いありません(笑)。

何かを決断するとき、迷ったらやるというのが、私のやり方ですが、このとき、まったく迷いは、ありませんでした。しいて言えば、これまで生きてきた経験の中から、いわゆるカンが働いたのだと思います。本能が、「面白そうだから、やってみようよ」と、私をそそのかしたとしか言いようがありません。

「出る!」と宣言したものの、ミャンマーという国についての知識は、皆無。いま自分が泊まっているホテルが、ヤンゴンのどのあたりにあるのかも分からない、そもそも当時は、ヤンゴンの市街地図さえ、存在していなかったのです。

ビジネスマッチングから帰国して1か月後、今度はたった一人で、ヤンゴンにやってきました。頼りは、前回の訪ね時に知り合ったミャンマー人と、現地に住んでいる数少ない日本人の名刺が20枚程度。カンタンな自己紹介と、ほんの30分程度の世間話をしただけの人たちです。悩んだ末、この人なら信用できそうだと、という3人に、事前にメールで連絡をとりました。もし、約束した場

所と時間に相手が現れなければ、それで終わり。当時は、ミャンマー国内で使える携帯電話を持っていなかったの、メール以外に連絡をとる手段さえなかったのです。

しかし、ここでも私のカンは、ばっちり働きました。ここでコンタクトをとったわずか3名の人が、右も左もわからない私に、その後のミャンマービジネスの基礎となるノウハウや人脈を教えてくれたのです。うち一人の方は、自分の会社のパソコンの中まで見せてくださり、ミャンマー人スタッフの会計やエクセルのレベルなど、リアルな実態を知ることができました。

類は友を呼ぶといいますが、最初に出会った3名の方は、人格的にも素晴らしく、彼らが紹介してくれる人も、また素晴らしい人たちばかりでした。あとでなぜ、日本からやってきた見ず知らずの外国人に、そんなに親切にしてくれるの?と聞いたことがあります。彼らからすれば、女性でありながら遠い国から、はるばる単身やってきて、ミャンマーの将来はこうあるべきだ!と熱く語る私は、ものすごくインパクトがあったようです。

当時のミャンマーは、三重帳簿は当たり前。「三重」とは、本当の帳簿と税務署用の帳簿、投資家用の帳簿です。いや、そもそも帳簿すら作らず、税金の申告は、アンダーテーブルを払っておしまい、そのどっこが悪いの?という会社の方が圧倒的に多数を占めていたかもしれません。

「それではいけない、これからやってくる外国の企業と渡りあうためにも、会計がいかに大事か…」

たどたどしい英語で一生懸命に話す私を、彼らは好意的に受け入れてくれました。「税理士」という肩書が、効果的だったのは言うまでもありません。Japanese CPTAというだけで、初対面の人が、忙しい中、わざわざ時間をつくり、会ってくれました。ローカルのCPAの女性から、「あなたは私と似ている。資格をもって、責任ある仕事をしている。同じ女性として信頼できる」と言われたこともあります。

もちろん、すべてが順風満帆だったわけではありません。以前にもこのコラムで紹介しましたが、これぞ運命の出会い!と思ひ、パートナーと決めたミャンマー人CPAが、48歳という若さで心筋梗塞で亡くなる、という悲しい出来事もありました。

それでも少しずつ、少しずつミナミの国に溶け込み、

◆筆者 原尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、「51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)」「トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)」「世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)」「一生食っていくための土業の営業術(中経出版)」など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

ミャンマー人の価値観を理解し、法律を学び、クライアントの数を増やして、3年目に入りました。

ミャンマーでは、事務所や店舗を借りるとき、1年契約が基本です。日本のように敷金や保証金を払う習慣がない代わりに、家賃の1年分を前払するのです。途中で解約しても、払った家賃は戻ってこないの、引っ越しは、1年ごとの契約更新のタイミングしかありません。

はじめて借りた事務所は、家賃400ドル。典型的なローカルのアパートメントでした。水道がポンプ式になっていて、スイッチを入れるのを忘れて、トイレの水も流せないの、ひたすら我慢…(笑)。普通の日系企業なら、絶対に借りたくないような物件でしたが、大家さんがとても親切な人で、ミャンマーで生活するためのイロハを教えてくださいました。

机を4つ置いたら、手狭になったので、1年後には、もっと広くて、もう少しだけ綺麗なローカルのマンションに引っ越しました。マンションに住んでいる人たちの生活レベルが、最初の事務所より明らかに高く、利便性も環境も良くなったのですが、それでも東京のオフィスに比べたら、お世辞にも綺麗とは言えない物件です。

海外に来ると、日本人ほど清潔好きな国民はいないとつくづく思います。階段や廊下に、ゴミが落ちているのは当たり前。コンクリートや壁は泥だらけで、あちこちにシミがこびりついていても、住民は誰も気にしません。ミャンマーでは、掃除をするのは、身分の低い人の仕事だから、自分の住まいとはいえ、廊下や階段を自分たちで綺麗にするという発想がないのです。

もう少し綺麗で、かつオフィスっぽい物件に代わりたいたと、1年後の昨年12月、契約更新はせず、新しい物件を探すことにしました。

そして、そして今回、苦節3年(笑)、ついに綺麗なオフィスに引っ越すことができたのです!今度の物件は、レーダンセンターという、誰もが名前を知っているいわゆるブランド・ビルです。

本当に少しずつですが、ようやくミナミの国のビジネスが、軌道に乗って来たように思います。スキー場で、いま降りてきたゲレンデの傾斜を振り返り、「わー、こんなに急な坂を滑ってきたんだわー」と、感慨にふける感覚に近いかもしれません。

もちろんまだまだ、中級コースや上級コースを制覇したというレベルではありません。やっと初級コースが、滑れるようになった程度の話。それでも、ミャンマーに進出して3年目を迎え、ちょっとだけ自分を褒めてあげたい気分です。

じつは3年目に入って、もう一つ、はじめての経験をしました。日本からいらしたお客様のアテンドを兼ねて、バガン観光をしたのです。

バガンは、1000年前にはじめてミャンマーを統一した、ビルマ族最初の王朝です。カンボジアのアンコール・ワット、インドネシアのボロブドゥールと並ぶ、世界三大仏教遺跡のひとつです。林の中に、2000とも3000とも言われる大小さまざまなバゴダ(お寺)が並び、その美しさと荘厳さに圧倒されました。

こんなに歴史のある世界遺産級の遺跡なのに、「有名ではない」というだけで、観光客の姿もパラパラ。近い将来、世界遺産に登録されたら、観光バスが大挙して押しかけること間違いなしです。次回は、バガンツアーについてお話ししますね。



新しい事務所の外観

新刊発売

ひと月3分、ムダ0確定申告

原尚美・山田案稜 著(技術評論社) 1,580円+税

経験や知識がゼロでも青色申告したい人のために、税理士が教えたくなかった最強の節約術を、フリーランス目線で解説した確定申告本。7割の人が見落としている経費や、落とせる経費と、落とせない経費のぶつちやけ境界線など、めんどろな申告を1秒でも早く終わらせたい、悩ましい経費の悩みをゼロにしたい人にオススメです。

